

三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

号
6 2012.3

《展覧会紹介》

心に太陽を持って

今、胸に響く有三の言葉

会期: 2012年3月3日—9月12日



展示室から

掛軸「心に太陽を持って」

山本有三筆 紙本・墨

有三が座右の銘として好んで書いた「心に太陽を持って」は、ツェーザル・フライシュレンの詩を訳したものですが、現在は格言としてご存知の方も多いのではないでしょうか。

フライシュレンはドイ

ツ南部シュトゥットガルトの生まれで、この地方の方言で詩や小説を書いた作家です。ドイツ文学者で有三の東京帝大独文科の後輩である高橋健二は留学中、戦前ドイツの家庭で聖書の言葉と並んで壁に掛けられていたフライシュレンの詩に感銘を受け、帰国後に講師を務めたラジオドイツ語講座のテキストに取り上げました。高橋からこれを聞いた有三はこの詩に深い共感を示し、編集中だった子ども向けの教養叢書『日本少国民文庫』(全16巻 新潮社)に載せることを決めました。

昨年3月に起きた震災は、私たちの物心両面に大きな爪跡を残しました。復興までの道のりが見通せない中、再びこの言葉が各所で取り上げられているのは、前向きに生きようというメッセージを、時代を超えて届けてくれるからではないでしょうか。

有三作品には困難を乗り越えて成長していく主人公がくり返し描かれています。有三は前向きに生きることの大切さを説き続けた作家であり、その作品はまさに「向日性の文学」と言うことができるでしょう。本展では「心に太陽を持て」「生きとし生けるもの」「路傍の石」などの作品から、強く語りかけてくる有三の言葉を紹介します。将来への希望を持ち難い時代と言われる今こそ胸に響く有三からのメッセージをお届けします。

満州事変勃発後の昭和10年に刊行を開始した『日本少国民文庫』は、軍国主義的な風潮から子どもたちを守り、時世に毒されないヒューマニズムのメッセージをお届けします。

心に太陽を持つ

精神を伝えるという目標の下、編集が進められていました。その初回配本の巻頭に掲載されたのが表現になっています。例えば原詩の末尾が「心に太陽を持て、そうすれば、なにごともよくなる!」などたのに対し、「心に太陽を持て、そうすりや、なんだってふっ飛んでしまう!」となっているように、情緒的・受身的な表現から、意思的に積極性の強い言葉へと手が加えられています。当時の有三は「なにごともよくなる」というような表現では物足りないと感じたのでしょうか、「誤訳だと非難されれば、おれが責任を負う」と高橋に語ったといいます。有三にとって

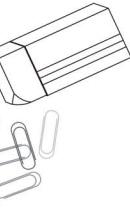
この詩は文庫全体を貫く理想を凝縮したメッセージであり、それだけ強く子どもたちに伝えたいものだつたといえるでしょう。

今読まれている訳は有三が生前最後に手を入れた形で、初訳よりも原詩に近い、静かで落ち着いた表現へと変わっています。『日本少国民文庫』は戦後も度々復刊されると共に、「心に太陽を持て」は単行本としても出版され、長く影響を与え続けてきました。

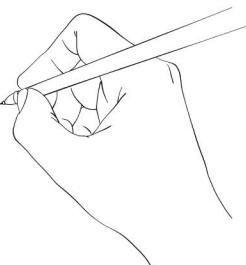
開催中の企画展では、原詩と初訳、そして現在のものをそれぞれ紹介しています。また掛けとて伝えられた資料も間近にご覧いただけます。有三が幾度となく訳し、筆を執った資料を通して、この言葉に込められた思いを感じいただければ幸いです。

(文芸企画員・学芸員 渡辺美知代)

手には仕事を与えよ



伊藤たかみ



紙面的にこういう書き出しも何だが、最近、山本有三の小説を入手するのはそれなりに手間がいるようになってきた。もちろん古本でなら入手で

きるし、この先、仮に電子書籍化がより進んでいけば、新品だの中古だのという概念自体、意味をなさなくなってしまうだろう。

それはわかっているのだが、小説家という職業柄、この現状に対し、そうそう暢気に構えてばかりもいられない。

替えて、その部分だけ原稿も書き直してくださいといたいわけだ。

僕だって、短いながらも編集者をやっていた経験があるから、その辺の事情はわからないでもない。ただやはり、複雑な思いは残る。本を選び直したり、原稿を書き直す手間を惜しんでいるのではなく、くやしいのだ。あんな名作が、もはや文庫でさえ手に入らないなんて。あれほどの作家の本が、もはや絶版だらけになっているなんて。こ

とえば、自分の好きな小説を読者にすすめてください、などといった類いのコラムを引き受けたときなどは要注意である。こうした仕事は楽しいもので、ついつい力を入れてしまいがちなのだけれど、あとになつてお伺いを立てる打診が返ってくることがあるからだ。あのう、そのう、実は紹介していただいた本の中に、もはや入手不可能のものがありまして、果たしてどうしましようか……。要するに、おすすめ本を別のものに差し

なるし、しまいには自分自身が彼らに声援を送られているような錯覚さえ覚える。人を呪わば何とやらということわざがあるが、あれと逆のパターンで、元気の、お祝い返しがつまっているのだ。こうしたいものが、時代と共に押し流されてしまうのを眺めているのは、どうも忍びない。

そういう意味で、『路傍の石』が比較的入手しやすいという事実には、ほっとする。奉公に出された吾一が貧しさの中でも努力を続け、少年から青年へと育つてゆく、いわゆる成長物語で、彼の不断の努力が時代を超えて胸を打つ。実際、印刷所で文選工となって働きつめるあたりなど、僕は

未だ、自分自身の姿と重ね合わせて読んでいるのを白状しなくてはならない。苦しさの程度は違いますが、大学卒業後、小説だけでは食べていけないからと、編集プロダクションに入社し、毎夜、一時か二時まで作業をしていた日々をついつい思い出してしまう。休日もない仕事漬けの二十代後半だったのに、活字のまわりにいるだけで本望だった。

出版関係の話が出たついでに、『心に太陽を持つ』に収録されている「製本屋の小僧さん」も、これ自体が熱量を持っているかのように力強くて頼もしい作品である。こちらはやや入手しづらくなっているようだが、子供向けの偉人伝という作りになつていて、お恥ずかしながら僕はマイケル・ファラデーという人のことをこの本で初めて知った。エジソンより半世紀も前、一七九一年に誕生したイギリスの歴史的化学者らしい。やはり貧しい鍛冶屋の息子として生まれた彼は、製本屋の見

習いとなつたものの、やがて商品の中身そのものに興味を持つ。親方の理解にも恵まれて、自分が仕事のためにあてがわれた本を片っ端から読み始めようになつたあかつきに、科学という一生の研究対象を見つけるという内容だ。どことなく吾一に通じるものもあって興味深いだけでなく、シンプルな読書の喜びを再認識させてくれる爽快感がいい。努力が正に報われるというのは、こんなにも心地のいいものだったなんて、一体いつから忘れていたのやら。

いや、吾一にせよ、ファラデーにせよ、読んでいてすっきりするのはまさにそこなのだ。努力、この一言に尽きる。

だが、ここでちょっと立ち止まり、考えてみた。そもそも、努力が報われて気持ちがいいということは、どういうことだろう？ つまり、現実の世界では、努力がそのまま報われることは少ないということの裏返しなのだろうか。

ふと、大学受験のため浪人していたとき、どこかの予備校の先生がいっていたことを思い出した。点数だけで評価される受験くらい公平な勝負は、これから先そんなにないのだから、試験を思う存分楽しめ、と。いかにも頭でっかちな浪人生をくすぐるような言い草だが、なるほど確かに、そういう一面があるかもしれない。しかし、すっかり大人になってから思い直してみると、そんなことは納得したくない自分がまだいるのも確かなのだった。この世は厳しいものだと、変にものわかれりがよくなつても仕方がない。だったらむしろ、山本有三作品の主人公たちのように、もがいても

がいて、前に進みたい。前に進めないなら斜めでもいい。そもそも成功するかどうかなんていうことなんか、もはやあとまわしで構うものかと、年をもうごとにそんな気分に支配されるようになつた。何せ、くだんの吾一でさえ、まだ真の成功はおさめていないのだから！ 小説が未完で終わつたことがあるにせよ、彼に本当のラストは訪れていないのに、読んでいてこれだけ爽快なのである。努力をしている彼と経験を共有するだけで、すでに読者は幸せになれる。

そもそも人間というやつは、成功以前に、それに向かって突き進むことのほうが好きなのかもしれない。結果より過程を楽しむ存在だといつてい。何もしないで立っていると、用事のない両手を“手持ちぶさた”に感じるのも、きっとそのせいなのだろう。だから、「手には仕事を与えよ」という格言もある。もっともこれは、大作家の作品を読んで得た、小作家である僕の言葉に過ぎないのだが、きっと間違つてはいない。努力とは、やがて来る幸せのための貯金でもない。我慢でもない。ただ、そうしたいからするものだ。

それとも、こういう感じ方もまた、古い？ やはり数ある名作と一緒に絶版扱いになるべき頭なのだとしたら、現代に生きていくということは、ずいぶんとつらくなつたものだ。つらいというより、面倒だ。シンプルに生きたい。

ちなみに僕が初めて読んだ山本有三は、母の蔵書だった。すすめられたのではなく、本棚にさりげなく転がっていたのを手にしたのがきっかけだが、この彼女がまさに、年がら年中、努力の人だつ



伊藤たかみ（作家）

一九七一年兵庫県生まれ。

早稲田大学政治経済学部

在学中に『助手席にて、

グルグル・ダンスを踊つて』

（河出書房新社）で第32回

文芸賞を受賞し、『ヒュ』。

初の児童書『ミカ！』（理

論社）で第49回小学館児童

月の路上に捨てる』（文藝春秋）で第21回坪田譲治文学賞、『八

月の路上に捨てる』（文藝春秋）で第135回芥川賞を受賞。昨年12月に最

出版文化賞、『ぎぶそん』（ボブラン社）で第21回坪田譲治文学賞、『八月の路上に捨てる』（文藝春秋）で第135回芥川賞を受賞。昨年12月に最新刊『お別れの、そのあとで』（光文社）を刊行。

ガイドボランティアリポート 6

記念館で活動中のガイドボランティアより交代でリポートをお届します

●今日はガイドの日

ドアを開けると、そこは昭和の穏やかな空間。鼻孔をくすぐるのは、時を経た西洋館特有の、ちょっと湿ったレトロな空気。「さあ」と、リセットボタンを押して3時間ほどのガイドのスタートです。同時に、前日目を通した資料の人名や年号が、どんどん不確かなものになっていきます。でも「作品は読んだし、遠い昔杉村春子さんの舞台も見たし、流れは押さえているはず!」と、気を取り直します。何よりも、来館者の方々との楽しいふれ合いが、後押ししてくれるはずですから。

(長江 静子)

●ガイド・マイウェイ

この建物の中はどんなだろう?ボランティアガイドに応募した動機の一つ。内部をじっくり見られる機会を与えられて、興味ある発見はいろいろ。それらのいくつかを来館者にお話すると「ここには何回か来ているが、そんな見方もあるのか」と仰っていただけることもあり、ガイドのし甲斐があったと嬉しくなります。有三の作品については、企画展示で様々な興味深い解説がされますが、館内に説明のないこの建物の魅力を、私なりのガイドで伝えることができたらと思っています。

(松崎 寿子)

朗読会を開催しました

三人の「女の一生」展関連事業として、文学座の瀬戸口郁さんによる朗読会を開催しました。明治30年頃から昭和初年までを背景に主人公・御木允子(みきまさこ)の半生を描いた山本有三の「女の一生」から抜粋でお届けしましたが、允子の心の動きが伝わってくる熱演でした。

朗読会を行った11月3日は「文化の日」ですが、有三と記念館と縁の深い日もあります。「文化の日」などを定めた祝日法は、有三が参議院議員として制定に関わった法律です。また1965(昭和40)年のこの日、有三は文化勲章を受章しています。そして1996(平成8)年同日に三鷹市山本有三記念館は開館しました。今回の朗読会では、「文化の日」にまつわる有三と記念館のエピソードを紹介するプレトークも行いました。

《 資料受贈報告 》

中島桓氏より中島氏宛の有三書簡など26点、門澤弘行氏より門澤正二氏宛有三書簡1点を含む計7点、澤田キヨ氏より山本有三著『ふしゃくしんみょう』1点をご寄贈いただきました。

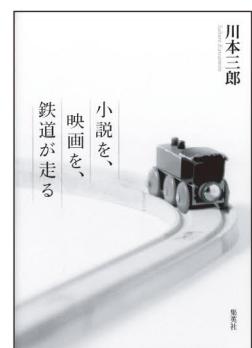


瀬戸口郁さん(文学座)

掲・示・板

»川本三郎著『小説を、映画を、鉄道が走る』で「路傍の石」が取り上げられています

小説や映画の中で描かれている鉄道の風景を、旅の記憶と重ねながら綴ったエッセイ集。「少年たちも鉄道に乗る」の章では、「路傍の石」の主人公・吾一が汽車の走る鉄橋の枕木にぶら下がるというエピソードや、奉公中の吾一が使い先からそのまま鉄道に飛び乗り、自由と夢を求めて上京する姿を取り上げています。明治時代の子どもたちにとって、鉄道は憧れであると共にとても大きな存在だったことが伝わってきます。



『小説を、映画を、鉄道が走る』
川本三郎著 集英社 2011年

»平成24年度の事業予定

※事業内容は変更する場合があります。

企画展①「山本有三戯曲の世界」9月より

企画展②「図面から読み解く山本有三邸」3月より

この他、春の朗読コンサート(5~6月)、子ども向けワークショップ(8月18日)、秋の朗読会(10~11月)を予定しています。ぜひご参加ください。

編集・発行

三鷹市山本有三記念館 Mitaka City Yuzo Yamamoto Memorial Museum

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀2-12-27
TEL0422-42-6233 FAX0422-41-9827
ホームページ <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日・年末年始（12月29日～1月4日）

※月曜が休日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。

入館料：一般300円（20名以上の団体200円）

※中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。

アクセス：JR中央線三鷹駅より徒歩12分

JR中央線・京王井の頭線吉祥寺駅より徒歩20分